

Report

“We hugged, worked, discussed, planned, and had fun!”

続々 第74回OMEPPギリシヤ大会報告

OMEPP世界大会に初めて 参加して（番外編）

―世界大会とその周辺

本原 圭

全私保連青年会議総務部副部長、
京都市・おいけあした保育園園長

1 作ること

ギリシヤのアテネにいますので、会場目の前の丘にあるパルテノン神殿に行かずして帰れません。まして美大の彫刻科卒の人間としては、ギリシヤ彫刻は基礎課題で多くのデッサンや模刻をしたので、神殿とその麓にあるミュージアムや考古学博物館にも立ち寄ってきました。まずこの神殿は、2千年も前の人が動力のクレーンを使わずして直径1m、厚み80cm、重さ

約8トンの石を積み上げて、あのような柱を50本以上もどのように立てたのか、山から切り出すことや運搬はどのようにしたのか、そんな技術力とそれをイメージした想像力、そして表現したいという思いの力、その歴史を越える存在感に只々圧倒されました。ギリシヤ国旗のような青い空に映える神殿は、2千年の時を超えて今なお輝いて何かを発しています。

とにかくギリシヤには多くの遺跡があり、そこにある神殿はかつて多くの彫刻で飾られていて、遺跡本来の姿をイメージするならば、それは大理石の具象彫刻がたくさんあるイタリアのトレビの泉です。神殿には多くの彫刻がびっしりと至る所にあつたそうで、ギリシヤ彫刻は海外にもたくさん持ち出されていますが、国内の博物館には5千年以上前のものから驚くほど大量に残っていました。展示品だけでも相当な量があるということは、作品になり得なかつた習

作はもつと多くあつたはずであり、またその技術を学ぶために使われた素材は……と考えると、博物館に収蔵されている作品は氷山の一角であるし、そのような作品が日常に多く存在した古代ギリシヤの文化レベルの高さ、表現に欠ける情熱、作品を大切にしたい、文化に欠ける経済力に、ため息が出ずにはいられません。

そして作品の細部を見ると、どれも作者の強い思いが伝わってくるものばかりです。嫌々作つたり、指示されてされて作つたりしたものは当たり前ですが残りません。考古学博物館では時代ごとに展示があつたのですが、その時のトレンドがあり、すなわち表現の可能性を常々探っていたことがわかります。

現代の利便性を追求した消費社会の中で、効率、利潤、採算性、無駄を省き削ぎ落としたものが、何千年もの時を超えて残ることがあるの

でしょうか。もしかしたら我々の文明で後世に残るものはデジタルデータのような手で触れないものかも知れません。

そんな世界に住む我々ですが、子どもたちとも作りをする時に、なぜ作るのか、作って何がしたいのか、日々考えます。もちろんですが、作る過程において表現したいという強い思いがなければ、もの作りはできません。ただ、そんなプリミティブな想いは本来子どもに最初から備わっていて、それらを自然に出せるように障壁を取って、どのように受け止めるかも重要になってきます。

そして今回深く印象に残ったのは、丘の麓にあるアクロポリスミュージアムでの経験でした。ここは2009年に改築された比較的新しい博物館です。もしアテネに行かれたらぜひともお勧めで、その展示はかなり趣向を凝らしている博物館の中で私は一番好きかも知れません。

この博物館では、パルテノン神殿の壁に飾られていた彫刻やレリーフが多く所蔵されています。ふと作品の間を通った時に気づいたのですが、図録やWEBではなし得ない作品の裏側も見られるようになっていました。よくよく見ると美しく完成された表面とは違い、裏には生々しく石を削ったノミの跡が残っているのではないですか。私自身は大学で彫刻を専攻していたので石彫も経験していますが、レリーフなど壁面

に飾るために作品の裏側を平にし接地面積を確保するのですが、驚くべきは2千年前の道具やそのノミのあて方が今のやり方とほぼ同じだったということなのです。

2千年の時を超えて生々しく残るそのノミ跡から、どのような格好で、どのように石を掘っていたかがリアルに浮かんできました。そして博物館の窓から見える丘の上に立つ神殿で行われた作業が、時空を超えてまさにその時に立ち現れた瞬間でした。彼らの作業がリアルに想像できたし、完成までの長い道のりや、神殿まで運び設置し完成を見つめたこと、2千年前の人でも作り終えた達成感を味わっていただろうし、まずは作ることが大好きなことが作品の細部からヒシヒシと伝わってきます。そしてそれは最初誰かに教わって始めたことだろうし、そんな作ることの魅力がたくさんあった古代ギリシャの文化レベルの高さを羨ましくも感じました。そして、自分たちは園で子どもたちにそんな作ることの魅力を伝えられているだろうかと感じました。

たまたま大理石という適度に削りやすく風雨に耐える素材があり、そこに人の表現したい、作りたいたいという強い思いがあった結果、2千年の時を超えて世界の人が目にはしている。そんなことを、ノミを振っている時に彼らは感じていたのでしょうか。現代はその頃と比べ便利になりましたが、彼らの理想とする世界になってい

るのだろうか。その時もおそらくこのような青い空のもとで制作に没頭していたであろう彼らに、聞いてみたいと思いました。遺跡という場の力と作品が見事につながっている空間を前にして、時空を飛び超え圧倒された1日でした。

そしてその日の夕方帰国の途についてなのですが、兼ねてから憧れであったモデルニスム建築群を見るために、トランジットをスペインのパルセロナにしました。そこでもガウディをはじめとする彼らの建築には表現にかけ熱い意気込みがヒシヒシと伝わってきて、手仕事の素晴らしさがたっぷり詰まったものばかりでした。

例えば、カサバトリヨという150年前に作



会場横のゼウス神殿、満月

られた建物は海をイメージして作られています
が、室内の木製両開きの扉が海の表現のために
3次元に曲がっています。普通扉といえば板状
のものですが、そんな常識は表現には邪魔とな
るものばかりで、複雑に曲がりくねった形はな
んと左右対称で、反対の扉も同じ形にうねっ
ています。そしてそれを支える天井も3次元に曲
がっています。どうやって作ったのでしょうか、
なかなか想像が付きません。そんな表現したい
という強い想いは時を超える力が備わってい
て、ものづくりということはこういうことだよ
と言わんばかりに、その表現の強さに圧倒され
ました。

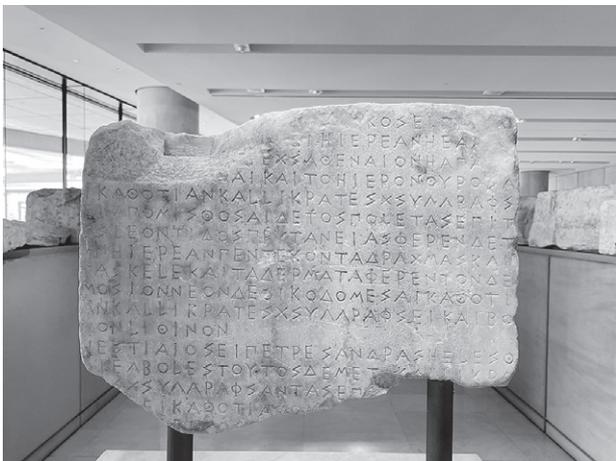
日本でも社寺仏閣に行けばそんなものづくり
の真髄を伝えてくれる絵や彫刻がたくさんあり
ます。帰国後久しぶりに三十三間堂に足を運び
ましたが、またそこでも時を超えて圧倒される
何かがありました。改めて我々はなぜ、子ども
と『ものづくり』をするのでしょうか。

2 一人の人として

海外でのタクシーは一期一会の極みであり、
流しのタクシーは危険な国もあり、とにかく外
国のタクシーでは運転手とたくさん話すように
します。話すことで何を考えているかお互いに
わかり、WEBでは知り得ない話を聞くことが
できるので、その国の知っていること、興味の

あることを総動員して話をしますが、そこで役
に立つのが好奇心です。

今回バルセロナで建築を駆け足で見て空港に
向かうのタクシーの運転手は、筋肉質の体でT
シャツの袖から派手なタトゥーをのぞかせてい
る30代前半のコロンビア人男性でした。最初に
出身を聞いた時にコロンビアということ、そ
の国名だけで聞きたいことがたくさん出てきま
した。というのも、私自身ラテン音楽が好きで、
特にキューバ、ブラジル、コロンビアはラテン
音楽3大大国と言われるほど偉大なミュージ
シャンを輩出し、世界に影響を与えたりズム大
国でもあります。「コロンビアといえばシャキ
ラだけれど、クンビア、バジエナートなど伝統
音楽も昔聞いてたよ」と私が言うと、「先週こ
の近くでリサンドロメサ（アコーディオンの大
御所）のイベントがあつて行つたよ」と信号待
ちでその時のビデオを見せてくれたり、「最近
キャロルG（ここ数年で一気にスターになった
シンガー）がいい感じよね」と言えば、「彼女は
一気に人気が出てきて、近々シャキラくらい
世界的なスターまでなるんじゃない？」と音楽
の話でどんどん共感できる会話が続きまし
た。 こういう時にあえていつも聞くのが、政治を
含めたこの街のことで、この地に来たきっかけ
です。それはどのようにその国の社会を見てい
るか、また彼にどんなバックグラウンドがある



2千年前の、ギリシャ語の掲示物



生々しく残るノミの跡

かがわかり、リアルな話を聞けるからです。

「コロナピア社会が政治腐敗で大変なのでこちらに来た」と言うと、一気に彼の声のトーンが低くなったことを感じました。そして言葉のリズムまでも変わりました。そのリズムに乗れるようにどうやって政治のことを訊ねようかと迷っている時、なぜスペイン語が話せるのかと逆に質問されました。観光地によくあることで、アジア人がスペイン語を話すと不思議がられません。「メキシコに住んでいたの」と言うとすぐに「メキシコも大変よね、コロナピアも大変だけどメキシコはもつと大変だと聞いたよ」。政治腐敗はラテンアメリカ社会の大きな課題で汚職問題が常に新聞紙面を賑わせています。

メキシコの大変な話を少しして、彼もコロナピア内戦のニュースには出ない裏話をしてくれて、その中で出てきた話がコロナピアで尊敬する日本人のことです。Kenji Yokoiさんという日系の方でコロナピアのスラムの人たちにどう生きるべきかを説いているとのこと。彼の話は常にウイットに富んでいて魅力があり、笑いあり涙あり、そして人生の学びがあるのだそうです。すごくいいからと動画を見るように勧められました。

運転手の彼には中学生になる娘と息子がいるそう、彼らは離婚した妻と共に生活をしているのだけれど、月に一度は彼と夕食を共にして、そんな時によくその Kenji Yokoi さんの話題に

なるとのことでした。彼の話の聞いていると本

当に共感できることが多くあり、そこから日本人をすごく尊敬するようになったとのこと、日本人の勤勉さや規律正しさ、特に子どもが学校で箒を持って掃除をする姿が、コロナピア人にとっては信じられないとのことでした。「学校でも家でも掃除をするのが当たり前のようになっている社会で子どもは汚すことが専門、箒を握ることなどあり得ない」と彼は言うので、「日本社会ではそれら規律正しさや勤勉さが同調圧力となり自殺してしまう人が多いのも現実で、その点ラテンアメリカの人は人生を楽しむ術を皆が知っていて、毎週末にフィエスタがあり、バケーションを長く取り、そんな楽しい暮らしを日本人は学ぶべきだと思うよ」と返しました。

「確かにどちらも良い面悪い面があり、多角的に物事を見ることは大切だね。でもそこから自分の責任で判断することが大事だと思うけど、まさに先週そのことを子どもと話していたところなんだよ」とのことでした。私自身が保育園で働いているとは伝えていないのですが、そんな子育て論の話になってきました。

彼の子育てはとにかく自分の責任で判断できるように、その材料を用意するといふものでした。「自由、自由というけれど、自由には責任がついてこそ自由よね。だからこそ、たとえ小さくても子どもが自分で判断ができるように口を挟んでいけないよ」と彼は言いました。そ



会場大学内、ギリシャ語の掲示物



アウグストゥスの像

ここで、「日本でも少子化からくるのか過干渉は問題になっていて、親がすべて判断してしまうし、子どもが考えない現実があつて。でも子どもが考える余地を大人が残しておくことこそ、子どもの力を信じてことだし、人として責任を持つことだし、それで信頼関係がつかうていくんよね」と私は言いました。

「[Exactamente así es! (まさにその通り!) 子どもであつても、1人の人だしね」と、タトゥーの入った右腕でいいねポーズをしながら、幼児教育の先生のような言葉を発した運転手の彼でした。国連の子どもの権利条約をまさに実践するような彼で、空港までの40分間そんなさまざまなことを途切れることなく話しましたが、人生いろいろあつて、今タクシートの運転手という職をしながら、人生を楽しんでいるようでした。

そして程なく空港に着き、雲一つない夕焼けの中で車からスーツケースを下ろし終えた時に「また日本と日本人が好きになったよ、いい旅を！」と握手、そしてハグをしてくれたので、「本当、いろいろ興味深い話ばかりでおもしろかった。Kenji Yokoi も YouTube で見てみるよ、そしていつかコロンビアに行ってみよう。元気で！子どもたちにもよろしく！」と伝え、お互いに笑顔で別れを告げ、走り出した車のテールランプがその茜色の空に溶けていきました。

飛行機を待つ空港ロビーで彼との会話を思い出し、考えたことです。ラテンの人たちはタクシーであつても会話が弾むと、その度合いで握手やハグで気持ちを表す挨拶をしてくれます。非接触の文化圏である我々日本人にはない習慣で、タクシートの運転手とハグなんてありえないのですが、方法は違つてもそんな気持ちを表すことは学ぶべきだといつも思います。

そんな時、突然電話が鳴りました。この当時は出国前72時間以内にPCR検査をクリアしなければいけないのですが、クリアできていたにもかかわらず、書類に不備があるためそれ自体が無効だと日本政府の機関から連絡が入りました。理由はAM12時41分という時間は存在せずAMは夜中のことなので、カウントすると72時間以上前になることから書類が無効だとのことでした。もちろん検査を受けたのは昼の12時なのですが、飛行機に乗る数時間前に「規律正しい日本」の厳しいコロナ対応に直面したのです。とにかく落ち着いて検査をした医療機関に連絡をし、理由を伝えメールで訂正版を送ってもらい、その後なんとか日本へ入国ができました。この医療機関が素早い対応をしてくれなければどうなっていたのでしょうか。

旅の終わりに

この数日間、いろいろなことがありました。



OMEF 日本委員会会長・上垣内伸子先生と

普段経験しない気候に出会い、普段嗅がない匂いを嗅ぎ、普段経験しないことを経験し、初めて出会う国の人と出会い、そしていつもの保育の話をする。言葉の裏にある感覚で共感ができ、世界を捉えるためのさまざまなヒントをくれた大会でした。

Welcome to the real world. そんなセリフが出てきた映画がありました。日本にいてはわからないことがあり、今回の参加でばやけた世界が少しクリアになり、これからやるべきことが明確になった気がしました。最初から最後まで余すところなくおもしろい、そんなOMEF世界大会初参加でした。

参加するにあたり、さまざまなお力添えをいただいたOMEF日本委員会の先生方、ギリ

シャでお世話になった先生方、そして大会期間中に園を守ってくれていた当園の職員に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。ございました。